



●令和2年度 遠隔授業の振り返りとFD活動の報告●

Contents

- 01** 前期の遠隔授業の振り返り、
Withコロナでのこれからの授業運営
・瀬口学長より
・FD推進委員長より
- 02** 前期の遠隔授業の振り返り、
Withコロナでのこれからの授業運営
～各FD推進委員より～

- 03** FD推進委員会活動の実施報告
・第5回カフェFD（オンライン開催）
・FD後援企画
・FD推進委員一覧

「知的財産としての遠隔授業」



学長 瀬口 和義

新型コロナウイルスによる感染症の拡大により教育界にも大きな波紋が広がっています。緊急事態宣言が発出された前期においては、5月の連休明けから全科目について原則遠隔授業を開始、後期については、原則対面授業とし、多人数の講義科目にあつては遠隔授業という方針で現在に至っています。当初は教員、学生も遠隔授業に不慣れで、互いに大きな負荷がかかりましたが、互いに経験を積むことにより、また遠隔授業に関するアンケートを通じて遠隔授業の長所・短所に関する認識が深まってきました。たとえば、遠隔授業はWi-Fi環境さえ整っていれば、居場所を問わないという大きな特徴に加え、学生からは自分のペースで進める、質問しやすいといった長所もあること、一方、実習系の科目では対面が必須との前提があるが、遠隔を加味したハイブリッド型にすれば、学びの質が深まる可能性があること、大学の学びの中でも重要な学生間の交流やコミュニティの形成には遠隔のみでは困難であることなどもわかってきました。

コロナの収束の目途が立たない現況下で、遠隔授業をせざるを得ない科目もあります。逆にコロナが収束したとしても遠隔授業の長所を発揮できるさまざまな場面も想定されます。加えて危機管理上の観点からも各教員が相応の遠隔授業のknow-howを身に付けておく必要もあります。

このような意味で、本学の遠隔授業について、実態の把握、know-howの共有、そして知的財産として形あるものにしておく必要があります。FD推進委員会は、既に授業改善に関する次の2冊の書籍を刊行し、FD活動に活用してきました。『より満足度の高い授業を目指して～武庫川女子大学公開授業と実践事例報告に学ぶ』、『Teaching Tips 授業改善のための工夫・失敗事例』これに引き続き、遠隔授業のknow-howをFDニュースなどに投稿いただき、FDの活性化に寄与することを願っています。

「With コロナ、After コロナに生きるFD活動をめざして」

遠隔授業のはじまり、これは誰も予想できなかった事態でした。時は、大学においてGoogleを利用したプラットフォームが徐々に進み始めた矢先のことで、情報処理（パソコン）に優れた教職員が中心となり、次々とマニュアルが作られていきました。日頃、パソコンが苦手な先生方も、今回だけはやむを得ず取り組まざるを得ない状況の中、試行錯誤を重ねるご苦労は大変なものだったと推察いたします。

感染拡大を防ぐためには、人との接触をできるだけ減らすことが最重要で、それに伴い、教員間での情報交換は大切と言いつつも、極端に減少したと思われます。FDの根幹は、コミュニケーションによって支えられています。今までであれば、直接会って、顔を見ながらお話しすることが何よりも大切と思っていたことが、このコロナ禍では、なかなか実践できない状況を作り出しました。そんな中、MeetやZoomといった機能を利用し、新しいコミュニケーションの場を活用したFDが育っていきました。

遠隔授業においても、ライブ型授業、オンデマンド型授業、資料配付型授業など、各々の技術とそして学生の反応を見ながら、教員の挑戦が続きました。それぞれの善し悪しがあり、教員だけでなく学生も初めてのことなので、どこまでの成果が得られるのかとても未知数な状況でした。

その後、感染拡大が少し収まった時期を狙って、対面授業を復活させることになりました。久しぶりに見た生の学生の顔は、何となく安堵感を漂わせる感じもありました。教員も学生もある意味成長したのではないのでしょうか。今や対面授業の重みや遠隔授業の大切さを知りつつも、その先を見据えながら歩んでいるようにも思えます。

今後のFD推進委員会では、今回それぞれの先生方で取り組まれた遠隔授業の事例を多く集め、Withコロナ、Afterコロナに向けて、授業運営に少しでもプラスになるようFD活動に活用していきたいと考えております。

FD推進委員長
保井 俊英

前期の遠隔授業の振り返り、With コロナでのこれからの授業運営

～各 FD 推進委員より～

02

1 基礎造形実習では、初めてコンセプトに基づいたヴィジュアル表現について学びます。類似授業の経験が皆無の新入生に対して、対面型のきめ細やかなやり取りをいかに遠隔で実現するかについて、各回の目標・方法とデザインプロセスにおける位置、オリジナリティと完成度の要因についての理解のため、実例をあげて視覚的に説明しました。4クラス同時進行のため、週1回非常勤の先生方、助手の皆さんを交えて遠隔での報告・反省会を行いました。

FD 推進副委員長（環境） 黒田 智子

図を用いた手法の提示
手法C：埋めてから部分的に抜く



実例の提示



2 新型コロナウイルスの対応として、対面講義がパソコンを通じての遠隔講義に代わり、日文の教員も学生も、手探りででした。所詮、通産省管轄の用字に対応したパソコンで、文学作品の用字や用語の変換を行うのはお手上げでした。対面授業の重要性を再認識することとなり、図書館とパソコンの利用がメインの遠隔授業にとって変わるなどありえないことを、改めて教員も学生も痛感しました。後期には、レポート提出を手書きに切り替えたところ、意外にも学生から好評でした。

(日文) 管 宗次



3 「てんやわんや」でした。コーディネートする「第3系」各科目の特性の違い、指導する教員10数名のICTスキルの差、また、コロナ事情による教材販売の遅れなど次々と課題が発生しましたが、みなさんの協力と理解を得ながら何とか乗り越えることができたというのが実感です。私はZoomとClassroomを初めて使用し、冷汗・脂汗をかきながらの対応となりました。悪戦苦闘しましたが、オンライン・ツールは様々な可能性を秘めていると感じました。

(英文) 辻 和成



4 心福では、遠隔授業で最も工夫が必要となった点の1つに、機密性が求められる授業資料のWeb提示があります。心理学や社会福祉学では、実習指導等の教材として実際の事例を扱う場合があります。しかし、そのような資料は秘密保持の立場から、遠隔授業で画面共有が難しい一方、口頭説明のみでは詳細がよく理解できないことが生じます。匿名性を担保する資料作成や提示の仕方について、遠隔授業では十分に注意を払う必要がありました。

(心福) 佐方 哲彦



(C)1999 Mandarage(WMU)

5 遠隔授業が始まり、これまで経験したことのない授業準備と実施に追われる前期でした。それでも、動画を配信することやMeetでの授業にも慣れていきました。その結果、対面で行ってきた時以上に授業の内容を見直し、丁寧に授業を進めることができたと思います。さらに、授業実施での具体的な困りごとを相談したり、授業づくりの工夫を学び合ったりする教育学科の先生の存在は大きなものでした。コロナ禍を乗り越える同僚性を確認できたことも大きな収穫でした。

(教育) 藤本 勇二



6 遠隔授業を他人事で眺めていた私、特に化学実験実習担当者、としては、新学期に突然押し寄せてきた荒波を前に呆然としました。ひと月程度の準備期間で不安満載の遠隔丸の船出も、実験者目線の操作動画撮影・編集をはじめ、レポート作成を円滑にする資料の配信と解説を心がけることで、座礁事故もなく受講生を目的港まで送り届けられました。遠隔丸・対面号、船の形態は違っても、大学教育という航路を見失わない限り大丈夫であることを実感する機会となりました。

(食物) 小関 泰平



7 これまで本学科必修科目「現代生活学への招待」では、ワールドカフェ形式のディスカッションを用いたグループワークを実施してきましたが、Meetで同形式のグループワークを実施することは難しいと判断し、個人ワークに切り替えて実施しました。学生からは「個人ワークであったことで、かえって自分の考えを深められた」という意見もあり、次年度以降のオンライン授業ではグループワークと個人ワークを効果的に使い分け、より深い学びとなるよう授業方法を改善していきたいです。

(情報) 株本 訓久

ワールドカフェ形式の グループディスカッション

グループ（今回は個人）で、やなせたかし『あなぼんまん』グループ画像、1979年について、4つのテーマで議論した上でグループ（個人）の『あなぼんまん』に対する意見をレポートにまとめてください。

1. 『あなぼんまん』に対する肯定的な意見
2. 『あなぼんまん』に対する否定的な意見
3. やなせたかしに対する肯定的な意見
4. やなせたかしに対する否定的な意見

8 設計演習を中心とするスタジオ型教育を実践する建築学科、景観建築学科においては、このコロナ禍による遠隔授業は本質的な問題でした。そうした制約の中、学生は、自宅で図面やスケッチを描き、模型を製作して、Web上で教員やクラスメイトと意見交換を繰り返すという不自由を余儀なくされましたが、その一方で、自らの考えを明快にまとめ上げ、分かりやすくプレゼンテーションすることにも意識が高まったことは、彼女たちの今後のグローバルな活動の基礎ともなりうることであると思います。

(建築) 田崎 祐生



9 「受講者とリアルタイムな意思疎通が図れる環境をオンライン上でも確保したい」という理由により、前期の全ての授業においてMeetを活用しました。タブレットを用いた「板書（→「五線ノート画像」にスタイラスペンで記述した内容を画面共有）」や「録画」等を授業後にClassroom上に公開。受講者はいつでもそれらを参照し「復習」することが可能でした。今回の経験より「知識の伝達」において有効である」ということを強く認識しました。

(音楽) 松浦 伸吾



10 担当科目には、1年次生の化学系科目もあり、登学したことのない学生に本学の雰囲気を感じられるよう、また臨場感を味わえるよう考慮し、講義が予定されていた教室で黒板を用いて学生が目線位置にカメラを置き、通常講義のように実施することを心がけました。質問に対しては、反応式や構造式を用いて説明するところを、メールの文章のみで表現するのが難しい場合があります。今後は、学生がより質問しやすく、またその解説を理解しやすい環境づくりも工夫したいです。

(薬学) 川崎 郁勇



11 苦労したのは、授業動画作成です。機器の扱いが不慣れで、最初の頃、一時停止後、再開しても、作動しなくなったり、音声だけ入力したつもりが、顔が映っていたりと、何度も録画することになり、疲れてしまいました。また、「Forms」では、解答方法の「ラジオボタン」と「チェックボックス」の違いを理解せず、複数解答でも「ラジオボタン」で作成し、全学生から「解答できない」とお叱りを受けました。

(看護) 川端 京子

12 経営学部の学生は大学自体も知らない1年のみという前提でオンデマンド型授業が始まりました。いかにわかりやすくそして、社会科学に興味を持ってもらえるようにと教員は苦労していました。私の担当は、会計学で演習科目的な面が強いのでPowerPointだけではなく手書きの資料(PDF)を用意するなど、これまで以上に理解度を上げることに注意をしました。また、コメントシートを毎回提出してもらい学生の負担度を量るようにしていました。レポートなどの負担増など全国の状況が聞こえてきている中、教員も十分に注意するの必要を感じました。

(経営) 鈴木 基史



13 前期開始後の5月に、オンデマンド型共通教育5科目の受講者に対して、不安に関する無記名アンケートを実施しました。161名(回答率73%)から回答があり、1年生の卒業留年不安が高かったことを受講生に伝えると「2年生の自分でも不安なので、1年生だったらさらにそうだろう」「みんな不安なことが分かって安心した」などの感想が寄せられました。特に2年生以上から1年生へのメッセージが、1年生の心に響いたように感じています。

(共通) 寺井 朋子



14 これまでも科目によってはClassroomを授業の一環として利用していましたが、全面的に遠隔授業というのは全く未知の領域でした。しかし、授業もさることながら最大の問題は、厳格、公正な評価だったと感じています。レポートの提出を求めれば、Web siteからのコピペはもとより、友人と共同執筆したと思われるものまでありました。時間指定をして短答形式の試験を実施すると、正答箇所、誤答箇所、間違え方まで同じ答案が出てきました。この課題を解消しない限り、今回のような緊急避難的措置ではなく、正規のカリキュラムに遠隔授業のみの科目を組み込むことは難しいと考えています。

(教務部長) 郷路 行生



15 遠隔授業が始まった前期は、先生方から遠隔授業に関する問合せが続き、その対応に追われる日々でした。後期も同様と予想していましたが、問合せが減少しました。この減少から私は先生方の ICT スキルの向上を強く感じました。そして、短期間に ICT スキルを大きく向上されたことに力強さも覚えました。これからも「コロナ禍での学修」をサポートして参りたいと思っております。

(教務課) 三木 麻弥



16 これまで、学業成績基準に満たない運動部学生に対して、定期試験の1か月前から週2日、空き教室を自習室として指定した教室において、自習を行う支援制度を実施してきましたが、前期の対面授業がオンラインに切り替わったため、学生一人一人とオンラインによる面談を実施しました。各人の受講状況やレポート課題の取組状況などを確認したところ、一定の成績向上が見られました。

(学生課) 三好 雅之



17 遠隔授業に対して教員や学生に対するアンケート結果によると「遠隔授業だから参加できる学生がいる」、「何度も見返して復習ができる」といった好意的な意見がある一方で「授業準備、課題採点等の負荷が大きい」、「多くの課題に追われて、内容をしっかり理解できない」等の意見もありました。対面・遠隔のどちらが優れているというのではなく、授業形態や学生数、目的等に応じた使い分けをしていくことが必要だと思えます。難しい部分もありますが、大学教育にはそれだけ新たな可能性があるとも言えます。FD 活動としてそれらの議論や情報交換を活発に行い、教育・学修活動の更なる充実に寄与できればと思っています。

(教育開発・IR 推進課) 田中 邦子



18 遠隔授業アンケートの結果から、先生方の必死の努力が伝わってくるとともに、学生の柔軟な対応力に驚きを感じました。遠隔授業が導入されて、授業形態はさらに様々な手法を用いられているかと思えます。これまでの授業の内容を見直すきっかけとなった今こそ、FD 推進委員会で遠隔授業をテーマに取り上げ、先生方の遠隔授業実践報告会などを企画していきたいと考えています。

(教育開発・IR 推進課) 牛居 典子

FD 推進委員会活動の実施報告

03

第5回カフェ FD (オンライン開催)

8月4日(火)、第5回カフェ FD を Zoom にて実施しました。5月の連休明けから始まった初の遠隔授業は、それぞれに手探りだったと考え、テーマは、広く「遠隔授業」としました。とにかく自由に疑問点を出し、困ったこと、工夫したこと、希望することなど、なんでもお話しいただくことが時期的に大切だと判断したためです。

前期が終了して間もない多忙な時期ではありましたが、教員と事務職員合わせて24名の参加者がありました。4~6名程度のグループに分かれ、話題不足を避けるために、前半20分、後半20分でメンバーを入れ替えました。カフェ FD を遠隔で行うのももちろん初めての試みでしたが、多くの参加者はすでに遠隔という形式に慣れておられると感じました。評価方法、活用可能なツール、学生対応など様々な話題提供がありました。接続環境によってコミュニケーションがスムーズにいかない場面以外は、おおむね活発な意見交換ができたと思います。

アンケートの回答では、よりディスカッションの内容を深めるために、グループの人数を3、4人に抑える、20分区切りのメンバー入れ替えは無くてもよい、テーマをもう少し具体的にした方がよいなど、心強い意見をいただきました。さらに具体的なテーマの提案や希望もあったので、可能な限りこれらに応えられるような内容で、次回のカフェ FD を企画していければと思います。

FD 推進副委員長 黒田 智子



FD 後援企画

FD 推進委員会では、各学科や部局等で行われている企画等について、全学のFD 活動推進にも繋げていけるよう、FD 推進委員会の共催・後援企画として連携を取りながら実施しています。今年度については、次の取組みを実施しました。

1. オンデマンド動画公開

①学生サポート室主催「合理的配慮を必要とする学生への授業内での対応」

学生サポート室では、障がいのある学生の支援を行われています。今回は、前期の遠隔授業を終えて見えてきた課題や、学生からの具体的な相談内容などについて30分程度の動画にまとめていただきました。

動画を視聴した先生方からは、「担当する授業で要配慮の学生がいたため、遠隔を含む授業や課題の出し方等について大変参考になった。」「普段、送付されてくる配慮申請願では該当学生の症状や対処法を文章のみでしか確認することができなかったが、今回の動画で具体的な内容（悩みなど）を知ることができた。」等のコメントをいただきました。



②教育開発推進室主催「全学向け：授業について考える～その1」

教育開発推進室では新任教員研修プログラムを担当しており、新規採用教員を対象とした研修の補足資料として、濱谷共通教育部長にご協力いただき、「成績評価の考え方を中心としたシラバス作成のポイント」を作成いただきました。内容は、新任の先生だけでなく、全教員にとっても意味のあるものと考え、FD 推進委員会としても共有させていただきました。

動画を視聴した先生方からは、「シラバスの考え方や評価方法について、具体的に示されていたのでよく分かる内容であった。」「シラバスが学生との契約であるということ、シラバスを使って学生と一緒により良い授業を作り上げるということ等、参考になることが多々あり、大変勉強になった。」等のコメントをいただきました。



引き続き、シリーズものとして「授業について考える～その2、その3」とコンテンツを準備していく予定としています。

2. 共通教育部主催「令和2年度前期共通教育懇談会」への参加

前期の共通教育懇談会にFD 推進委員4名が参加させていただきました。今回は、Meet を使ったオンライン開催でしたが、10名程度×4グループに分かれて、遠隔授業を実施してみて感じたことや工夫、また、困ったことや課題等について意見交換を実施しました。

グループに分かれての意見交換では「遠隔授業になり、学生と連絡が取りやすくなった分、学生から今までなかった頻度で問い合わせがあった。教員への連絡ルールを決める必要もあると感じた。」「今回、自身の授業は主に Classroom を活用したオンデマンド型授業であったが、受講した学生の反応を聞くと、対面だと置いていかれる授業でも時間をかけて動画で学べたというコメントもあり、遠隔授業ならではの良い点も見えてきた。」等の様々な意見がありました。

先生方と意見交換をしながら、遠隔授業の課題点だけでなく、良い点も知ることができたので、FD 推進委員会を通して課題点については解決策を、逆に良い点については更に活用・発展していけるよう検討をしていく必要もあると感じました。今回は共通教育部の企画に参加させていただきましたが、今後も学内の様々な学部・学科・部局等と連携し、さらなるFD 活動の推進に繋げていければと思っています。

(教育開発・IR 推進課) 岩本 直子

FD 推進委員一覧

	役職	所属	氏名		役職	所属	氏名		役職	所属	氏名
1	委員長・委員	健康	保井 俊英	8	委員	情報	株本 訓久	15	委員	教務部(英文)	郷路 行生
2	副委員長・委員	環境	黒田 智子	9	委員	建築	田崎 祐生	16	委員	教務課	三木 麻弥
3	委員	日文	管 宗次	10	委員	音楽	松浦 伸吾	17	委員	学生課	三好 雅之
4	委員	英文	辻 和成	11	委員	薬学	川崎 郁勇	18	委員	教育開発・IR推進課	田中 邦子
5	委員	心福	佐方 哲彦	12	委員	看護	川端 京子	19	委員	教育開発・IR推進課	牛居 典子
6	委員	教育	藤本 勇二	13	委員	経営	鈴木 基史	20	委員	教育開発・IR推進課	岩本 直子
7	委員	食物	小関 泰平	14	委員	共通	寺井 朋子				